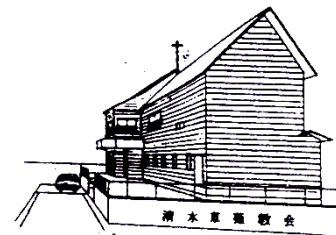


《今朝の聖書箇所から》

今朝の箇所は、ヨハネ福音書の中でも一番内容を鮮明にしている箇所の一つです。“よみがえりの力は主にのみある”ことをもって、“父とわたしは一つである”とユダヤ人の中であからさまに語られたことは、神を冒瀆するものでした。“石で撃ち殺そうとしています(8節)”という弟子達の言葉が、よく表しています。このことについては、先週の聖書からも読んだことです。さて、ヨハネがバプテスマを授けていた場所で、イエス様は、ラザロの病気のことを聞かれることとなります。ここに冬の間、退いておられたのです(10章40節)。1節に出てくるベタニヤ村は、この場所よりは、むしろエルサレムに近いところで、イエス様もよく通られた所です。ルカ10章38節に、マルタとマリヤの記録がありますが、ここに兄弟がいてその名をラザロといいました。3節で、彼女たちが人を遣わしていることから分かりますし、“友ラザロ”と11節でよんでいます。また“あなた(イエス様)が愛しておられた”と言わしていることから、親しみ深い村であり、家族であったことも分かります(5節)。このような中で“第七のしるし”といわれている、“ラザロの死からのよみがえり”の出来事が起きることとなります。そこには神様の計画がありました。“この病気は死ぬほどのものではない。それは神の栄光のため、また、神の子がそれによって栄光を受けるためのものである(4節)”とあるのがその目的です。次に“もう一度ユダヤに行こう(7節)”という言葉が続きます。それば危険なところ、殺されるかもしれない所だったので。弟子の決意もよく分かります(16節)。イエス様のいてくださる昼の時間(9節)、私たちは主の栄光を目の当たりにすることができます。しかし、苦難の時が訪れた時、多くの人々が、黄泉の試みにつまずくのです。バプテスマのヨハネは何の“しるし”も行わなかったが、みな本当だった(10章41節)と、記されているところに続くことを思い出しましょう。私と父は一つ、と宣言された方が私たちとともにいてくださるのです。イエス様のみがみ父と一つということはありません。み父もまたイエス様と一つなのです。御霊に導かれて、主を受け入れた時、そこにはみ父とも一つの、救い主なる聖霊が私たちに伴ってくださるのです。

週報

2008年 9月 21日



伝えよう 救い主を
迎えよう 主の民を

日本フリーメソジスト

清水草薙キリスト教会

牧師 村上定幸

教会学校	毎日曜日	午前 9:00
礼拝式	毎日曜日	午前 10:30
	(聖餐式 第一日曜日)	
夕礼拝式	毎日曜日	午後 7:00
エステル公会	毎水曜日	午前 10:30
聖書研究祈禱会	毎水曜日	午後 7:00
ホームページ	http://kusanagi.church.jp/	

〒424-0885

静岡市清水区草薙杉道3丁目2-26

☎054-345-4070 E-Mail grace@big.jp